

日本語学習支援



話す・読む・書く

Communication

## [1] 難民に対する日本語学習支援の意義

### (1) 日本語学習支援の意義

日本で生活する上で、日本語ができることによるメリットは様々です。まず、多くの人とコミュニケーションがとれ、人々と社会的な関係性を築くことが可能になります。関係性が築けることで、よりよい仕事に就くことができるようになったり、生活上の楽しみが増えたり、安定した生活を送るための情報を得やすくなったりします。また、日本語がわからないことによる不安感がなくなり、精神的にも安定した生活を送ることができるようになります。難民が、社会的にも精神的にも安定した生活を送りつつ、十分に社会参加をして、地域社会の発展に貢献するためにも、日本語学習支援は欠かせないものです。

### (2) 難民特有の背景と事情

難民に対する日本語学習支援には、様々な配慮と方策が必要です。

まず、難民は一般的な外国人に比べて移動の自由に制限があり、母国の状況が改善するまでは国に帰ることもままならない状況におかれています。そのため、難民がこの日本社会でなんとかやっていくために、日本語力を向上させることは必須の条件です。

また、難民の場合、出国の経緯や居住地などから同郷者コミュニティを形成しにくいという事情もあります。同郷者ネットワークがあれば、そのなかで仕事を探したり、生活の相談をしたり、食材を購入したり、お祭りに参加したりすることもできます。様々な情報を入手することで、日本語面のマイナスを補うことも可能です。ですが、そのようなつながりを作りにくい場合は、日本人コミュニティと日本語だけでつながりを作らなければならないとい

うハードルがあります。したがって、難民にとっての日本語学習は、まさに日本で生活する上での生命線と言えるでしょう。

さらに、来日動機という点でも難民特有の事情があります。外国人が日本にやってくる場合、たいていは「留学生として〇〇を学び、キャリアアップしたい」とか「お金を稼いで帰国したい」などの目的意識があります。しかし難民の場合、自国から逃れること自体が目的になっています。したがって、日本に来て生活する際の目的意識や日本語学習動機をいかに高めていくかという支援も大切なポイントとなります。また、長らく難民キャンプで生活していた難民であると、都市生活や教室で学ぶということ自体に慣れていない人もいます。生活の基礎的な知識・方法を学ぶことや、「学び方を学ぶ」ということなども大切な要素です。

## [2] 日本語学習支援の考え方

### (1) 目標設定

日本語を学習する際にどのように目標設定をすればよいでしょうか。生活・仕事で日本語を使う難民の場合、テストの点数を目標にするのではなく、「日本語で具体的に何ができるようになるのか」を、支援者と学習者と一緒に考えながら目標設定をするとよいでしょう。

難民に対する日本語学習支援では、第三国定住難民に対する支援の枠組みとして、以下のような日本語能力の段階的目標が、文化庁から示されています。第三国定住難民の場合、現在は定住支援施設における集中的研修が6ヶ月おこなわれ、6ヶ月終了時の目標が、レベルⅡの基礎段階の修了となっています。レベルⅤの自立段階までいくには、最低でも2年ぐらいの時間がかかる計算になります。

図表13 第三国定住難民に対する日本語能力評価基準表(大人)

段階			I 入門	II 基礎	III 要支援	IV 見守り	V 自立
言語行為	話す力	日本語を全く話すことができない。	いくつかの単語を理解し、定型のあいさつと最低限の自己紹介ができる。	かなりの助けがあれば、単語や短い文で何とかやりとりできる。	助けがあれば、やりとりを続けることができる。	必要に応じて周囲の助けを借りながら、やりとりを続けることができる。	時折文法的な誤り等が見られるものの、問題なくやりとりを続けることができる。
	読む力	日本語を全く読むことができない。	ひらがな50音を読むことができる。	かなりの助けがあれば、ひらがな・カタカナで書かれた平易な文章を読み、その内容・情報を読み取ることができる。生活の中のいくつかの漢字(標識等)の意味を理解することができる。	助けがあれば、平易な文章を読み、おおよその内容・情報を読み取ることができる。	必要に応じて周囲の助けを借りながら、学校や役所等からの文書を読み、おおよその内容・情報を読み取ることができる。	時折誤った解釈が見られるものの、辞書等を使いながら様々な文書を読み、内容・情報を読み取ることができる。
	書く力	日本語を全く書くことができない。	ひらがな50音を書くことができる。	かなりの助けがあれば、ひらがな・カタカナで平易な文章を書くことができる。	助けがあれば、自分に関する基本的な情報や、平易な連絡・報告等の文章を書くことができる。	必要に応じて周囲の助けを借りながら、漢字を交え用途に応じた書式で文書(メール・履歴書等)を作ることができる。	時折文法的な誤り等が見られるものの、漢字を交え適切な書式・書体で文章を作ることができる。

また、難民が日本で生活する上でどのようなことができるとよいかを考える必要があります。例えば、2010年に文化庁が作成した「『生活者としての外国人』に対する日本語教育の標準的なカリキュラム案」では、具体的な場面や行動が一覧として示されています。「健康・安全に暮らす」、「消費生活を行う」など、8項目が取り上げられ、「健康・安全に暮らす」の下位項目として、「医者 の診察を受ける」、「病気への対処法・生活上の注意などを質問し答えを理解する」など、具体的な行動事例が挙げられています。日本語の語彙や文法を覚えること、資格を取得することではなく、「今の段階では何ができるようになればいいのか」を考えながら、生活上の具体的な場面でのコミュニケーションができるようになることを目標として設定するとよいでしょう。

## (2) 難民受入れをおこなう際に必要な基本的リソース

地域における日本語学習支援を考える際に、支援をおこなうためのリソースの確保を検討する必要があります。その際、人的リソース、物的リソース、情報リソースの3つの観点から見るとよいでしょう。

### ① 人的リソース

人的リソースとは、日本語学習支援全体をデザインする「コーディネーター」と、実際に支援をおこなう「支援者」が主なものとして挙げられるでしょう。ここでいうコーディネーターとは、定住支援チームに参加する日本語学習支援の担当者のことです。

「コーディネーター」に関しては、支援の専門的知識が必ずしも求められるわけではなく、支援に関する事柄を誰に、またはどこに頼めばよいかという情報を持っていることが重要となるでしょう。また、教室での学習内容と職場や生活を結びつけて課題を発見したり、課題の内容によって関係各所と情報交換しな

がら支援のあり方を考えたりする能力が求められます。「支援者」に関しては、地域社会で生活する外国人に対する支援に携わった人であれば、難民支援に対する経験がなくても概ね問題は無いでしょう。それらの人的リソースが見つけれない場合は、当該地域でそうした人材を育てていくこともできます。

### column

#### コーディネーター

地域在住外国人に対する日本語教育では、2000年代半ばから、地域におけるコーディネーターの必要性が強調されています。コーディネーターの役割や資質は、地域によって千差万別ですが、全体を見渡して大局的に支援の方向性を決めることが求められます。文化庁国語課では、地域の日本語教育に携わる「地域日本語教育コーディネーター」の育成をおこなっています。

### ② 物的リソース

物的リソースとは、学習の素材になる教材・教具や、教室を開くためのスペースなどが挙げられます。教材・教具については、当該地域で使い慣れたものがあればそれも利用しながら、少しずつ目標にそった教材を考えていけばよいでしょう。教室については、学習を定着・継続させるためにも、職場や住居の近くで通いやすいところに教室が開設されていることが非常に重要です。

### ③ 情報リソース

情報リソースとは、難民に関わらず地域の日本語学習支援に関する情報のネットワークへのアクセスのことです。すでに外国人住民が多く在住している自治体や、いわゆる「集住地域」と言われるところには、様々な先行事例が蓄積されています。それら

の情報を参考にすると有益でしょう。また、外国人住民の日本語学習支援は、多くの地域で「国際交流協会」やそれに類する団体がおこなっています。そうした団体との協力・情報交換により、支援内容の具体化が図れるでしょう。また、そうした団体がない場合には近隣自治体の国際交流協会との連携も重要でしょう。

#### column

#### 教材について

経験の少ない支援者にとって、教材は支援の道筋を決める大切なものです。ですが、市販の教材は、地域の実情とは懸け離れた場面や言葉も多く出てきます。市販の教材の場面や語彙を地域特有のものに置き換えるだけでも、学習者にとってはずいぶん「役立ち感」が変わってきます。また、教材を選ぶときには、教材作成や販売のプロである出版社や書店に積極的に相談するとよいでしょう。

### (3) 難民受入れに有効な地域の言語環境

前節の人的・物的・情報リソースの確保に加えて、地域の言語環境や学習環境などを、幅広い視点から捉えるとよいでしょう。ここでは「言語環境」、「学習環境」、「受入側コミュニケーション」、「参入側学習」の4つの要因からチェック項目を例示します(図表14)。受入れにあたって関係各所が情報を共有し、地域の実情に合わせて受入れ態勢を整備するという視点を持つ必要があります。またこれらの要因や項目を検討すること自体が、難民を取りまく全体の環境の把握や、関係各所との役割分担を明確にすることにつながるでしょう。このような難民支援の仕組みづくりは、他の一般的な在留外国人に対する支援にも裨益することが期待されます。

図表14 難民を受け入れる際の言語環境に関するチェック項目例

#### 〈言語環境要因〉

- 外国人同士が母語や共通言語で情報交換できる場がある
- 安全や生命に関わるものはわかりやすいピクトグラム(絵文字)が整備されている
- 重要な掲示物や文書にはルビがふられている
- 意思の疎通が難しいときにいくらかでも時間をかけてやりとりできる機会がある
- ルーティンの社会的活動にはわかりやすいマニュアルや多言語版が準備できる
- 母語による相談の場が定期的に提供されている

#### 〈学習環境要因〉

- 外国人が定期的に学習できる機会が提供されている
- 学習の場がある程度利便性のよいところにある
- 仕事をしている外国人が参加できる日時に学習の場がある
- ウェブサイト上の学習ツール、自学自習の方法などの情報を提供することができる
- 日本語教育の専門家の協力を得られる

#### 〈受入側コミュニケーション要因〉

- 外国人がわかりやすい、もしくはわかりにくい日本語の伝え方や表現について知っている
- 外国人と積極的にコミュニケーションを取り、相互理解を深めようとしている
- 困った時に頼ることのできる通訳者や外国語話者が把握できている
- 外国人の日本語力を測定する方法を知っている
- 定期的に外国人のコミュニケーション状況をモニタリングできる
- 地域や職場にいる外国人の抱える課題を把握する仕組みが整っている

#### 〈参入側学習要因〉

- できること、できないこと、できるようになりたいことなどが明確になっている
- 定期的に日本語学習を行う時間や場所を自ら調整して確保できる
- キャリアプランを明確化し、日本語学習を継続する意欲を持っている
- ウェブサイト上のリソースや周囲の人をうまく使うことができる
- 学習の支援をしてくれる適当な人が周囲にいる

図表15 日本語学習支援の流れ

◎は他の分野との連携が必要な項目

※P41 図表13参照

フェーズ	受入れ準備 (6ヶ月前～到着時)	初期Ⅰ・Ⅱ (到着時～1週間)	初期Ⅲ (1週間～3ヶ月)	中期Ⅰ (3～6ヶ月)	中期Ⅱ (6ヶ月～1年)	見守り期 (1～2年)
支援体制	<ul style="list-style-type: none"> <li>○日本語学習支援チームの結成                             <ul style="list-style-type: none"> <li>●日本語学習支援の全体をデザインするコーディネーターの決定</li> <li>●日本語学習支援者の確保</li> </ul> </li> <li>○受入れ地域の日本語学習支援リソース(支援者、教材、教室、類似の事例など)の確認</li> <li>○文化庁(難民への日本語教育の担当官庁)、他の難民支援団体などの事例収集、相談</li> <li>◎職場や学校との連携の確認</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○学習者の初期日本語力や言語学習経験などのヒアリング(通訳を介して)</li> <li>◎定住支援チーム内、日本語学習支援チーム内での情報の共有                             <ul style="list-style-type: none"> <li>●学習者に関する個別情報</li> <li>●初期日本語力や言語学習経験など</li> <li>●日本語学習についての設定目標</li> </ul> </li> <li>◎日本語学習支援者、職場や学校での「やさしい日本語セミナー」など、勉強会の実施</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○日本語学習支援の定期的モニタリング</li> <li>○通訳を介した学習相談の実施</li> <li>○学習支援体制に加えて学習アドバイス体制の構築</li> <li>◎定住支援チーム内、日本語学習支援チーム内での情報の共有                             <ul style="list-style-type: none"> <li>●「日本語のできるようになったこと」</li> <li>●通訳を介した学習相談の内容(学習課題、生活課題など)</li> </ul> </li> <li>◎地域住民との交流(定住支援チームと協力しながら)</li> <li>◎就労先関係者との顔合わせ・交流</li> <li>○上記を通した支援内容・支援体制の再考</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○日本語学習支援の定期的モニタリング</li> <li>○通訳を介した学習相談の実施</li> <li>○自立的学習に向けた学習リソースの把握と提供</li> <li>○学習アドバイス体制の継続実施</li> <li>◎定住支援チーム内、日本語学習支援チーム内での情報の共有                             <ul style="list-style-type: none"> <li>●「日本語のできるようになったこと」</li> <li>●通訳を介した学習相談の内容(学習課題、生活課題など)</li> <li>●学習記録</li> </ul> </li> <li>◎職場・学校(子どもがいる場合)との情報交換、課題把握</li> <li>○上記を通した支援内容・支援体制の再考</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○日本語学習支援の定期的モニタリング</li> <li>○個々のレベル差を考慮した学習相談の実施(必要に応じて通訳をおく)</li> <li>○学習アドバイス体制の継続実施</li> <li>◎定住支援チーム内、日本語学習支援チーム内での情報の共有                             <ul style="list-style-type: none"> <li>●学習相談の内容(学習課題、生活課題など)</li> <li>●学習記録</li> </ul> </li> <li>◎職場との情報交換によるキャリア形成支援の検討</li> <li>○上記を通した支援内容・支援体制の再考</li> </ul>	
支援内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>○受入れ環境のアセスメント実施</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○日本語学習の目標設定[具体的な目標]                             <ul style="list-style-type: none"> <li>●あいさつや返事などごく簡単な決まり文句が言える</li> <li>●名前や住所など生活に必要な最低限のことが日本語で表現できる</li> </ul> </li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○「Ⅰ入門段階※」ができるようになることを目標として、場面を特定して学ぶ(買い物、食事、病院、銀行、交通機関など)</li> <li>[具体的な目標]                             <ul style="list-style-type: none"> <li>●生活に必要な基本的な文字が読める</li> <li>●日常生活で触れる日本語表現を自分で調べて学び進めることができる</li> </ul> </li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○「Ⅱ基礎段階※」の日本語を各技能バランスよく学ぶ[具体的な目標]                             <ul style="list-style-type: none"> <li>●自分の考えていることや将来のことについて話したり書いたりできる</li> <li>●周囲の手助けを得ながら自立的に学習を進めていくことができる</li> </ul> </li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○「Ⅲ要支援段階※」の日本語を各技能バランスよく学ぶ[具体的な目標]                             <ul style="list-style-type: none"> <li>●助けがあれば、ある程度複雑なことを話したり書いたりできる</li> <li>●自立的に学習を進めていくための自分なりの方法を確立している</li> </ul> </li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○「Ⅳ見守り段階※」「Ⅴ自立段階※」の日本語を各技能バランスよく学ぶ[具体的な目標]                             <ul style="list-style-type: none"> <li>●必要に応じて助けを得ながらも、複雑なことを話したり書いたりできる</li> <li>●自立的に学習を進めていくための自分なりの方法を確立している</li> <li>●困ったときやキャリアアップをしたいときに相談できる人的ネットワークを確立している</li> </ul> </li> </ul>

## [3] 日本語学習支援の具体的な進め方

### (1) 日本語学習支援の段階

来日から定住に向けての日本語学習の流れを考えると、大まかには図表15のようになると言えるでしょう。

### (2) 支援から自立(自律)へ

支援の段階が進むにつれて、支援の割合が減っていき、自立の割合が増えていきます。「自立＝独力で」と考えがちですが、わたしたちは社会生活を営む上で、様々に人の助けを借りて生きています。むしろ、「自立＝周囲の人の助けをうまく借りながら自己決定をしていくこと」、「自立＝自律」と捉え、相談できる他者がいつもいる環境を整えていくことが支援者に求められるでしょう。

この自律的な学習の際に有効に機能するのが「ふりかえり」です。自分がやっていることをふりかえり、その成果と課題を自分自身で把握し、次に何をすべきかを考え、計画的に学んでいく。このサイクルを作り出すことで、学び方を学ぶことができるでしょう。支援者の適切な助言や支援内容のデザインが自律的学習の大きな助けとなるでしょう。

このような適切な支援をおこなう際に使えるツールとして「ポートフォリオ」があります。「日本語学習」、「ポートフォリオ」で検索するといろいろと出てくると思いますが、文化庁が作成した生活者向けのものもありますので参考してください(資料編：資料番号21)。

### (3) 日本語教室の役割

難民が日本で生活をする上で、日本人との接触は避けて通れません。その入り口となるのが日本語教室です。難民にとって日本語教室は、社会的な拠り所として重要な機能を果たします。教室以外の日本社会と違って、日本語教室が難民にとっ

て拠り所として機能しやすい要素は、以下のような点が挙げられるでしょう。

- 自分たちにとって共感的な支援者がいて、学習の進め方をアドバイスしてくれる
- 励ましてくれる仲間や同じように日本語を学ぶ外国人の仲間がいる
- わからないことがあっても「試しに」やってみることができ、ミスや失敗が許される
- 日常生活でわからなかったことや疑問に思ったことを質問して理解することができる
- 自分一人ではできないことを手伝ってもらって解決することができる
- 自分の現在の能力や学習の進捗について客観的に評価してもらうことができる

この一覧からわかるとおり、日本語教室の役割は、日本語の文法や語彙の知識を学ぶだけではありません。日本語を教えることに関する専門家だけでなく、共感的な支援や仲間が必要です。個別学習だけでなくグループによる学習なども取り入れるなど、これらの点を重視して日本語教室の役割やあり方を考えるとよいでしょう。

## 教室と学習者との関わり

### ① タイミング

ある日Aさんから「日本語、勉強したいです」という電話がありました。すぐに日本語支援のボランティアと場所を探し始めました。支援できる状況を整えるまでに1か月かかり、ようやくAさんに電話ができました。すると、「その日は仕事、あります。勉強したいけど、また電話します」とのお返事。結局その後、Aさんからの電話は一度もありませんでした。「1か月」は私たちの想像以上に長い時間だったのでしょうか。「完璧」に体制を整えて支援を始めようと思わず、面談や状況の確認など、できることから始めていればよかったかもしれません。「勉強したい!」…そのタイミングを失わないようにしたいですね。

### ② やめていく理由

せっかく日本語教室に通い始めたのに、やめていく人もいます。「教室の時間も仕事が入ってしまった」、「子どもをみてくれていた家族に仕事が入った」、「今日も、来週も病院。仕事は休めないし…」などの理由です。そんな時、「じゃあ、この時間に変更しましょう。それなら大丈夫でしょ?」と、こちらから一方的に解決策を提示することがあります。でも、それが学習者を追いつめることもあります。本音は「私は覚えるのが苦手。どんどん覚えろと教えられても、うまくできないから、ごめんさい」、「子どもの学校や家のことが大変だから、勉強はもう無理…」、「勉強、ちょっと疲れました」という場合もあるかもしれません。急がず急かさず、学習者と一緒に「ただ」話すことから解決策が見えることもあるかもしれません。

## [4] 日本語学習支援の留意点

### (1) 日本語学習は難しいか

一般的には「日本語は難しい」と言われることが多いですが、勉強する人の母語と学ぶ外国語の「距離」も、勉強のしやすさに大きな影響を与えます。日本語の場合、例えば、韓国語話者にとっては、文法や語彙面で似ているものがあるので、学びやすい言葉だと言えます。難民の母語と日本語の共通点を把握しておくことで支援を進めやすいでしょう。

### (2) 関わる日本人側の意識変革

外国人が日本語を習得するまでの間は、外国人にわかりやすい伝え方をするなど日本人側の意識とスキルの変革も重要です。「やさしい日本語」(資料編:資料番号16)として昨今注目されているものですが、文を短く切って簡潔に伝える、漢字にルビをふる、過剰な敬語を使わない、日本語に特有のオノマトペ(擬音語擬態語)をできるだけ使わない、といった工夫でもわかりやすい日本語になります。これも大切な「支援」です。

### (3) 日本語学習支援を生活や仕事から切り離さない

言語学習というと、多くの人は「語学」のイメージで考えがちです。しかし、日本で生活する難民に対する日本語学習支援では、「語学」として他の支援と切り離すことは大きなマイナスになります。就労も含めた生活上の経験と日本語学習支援をどのように組み合わせるか、支援者にはそれがもっとも重要なポイントとして認識される必要があります。



## リーマンショックと日系人

2008年に起きたリーマンショックによって、日本国内の製造業に従事していた南米からの日系人の多くが職を失いました。新たな仕事を探すために、日系人がハローワークに殺到しましたが、そのときに、10年以上住んでいても日本語で名前や住所が書けないという人がたくさんいました。「日本語学習」、「生活」、「就労」が切り離されてしまったら、何年住んでいても言葉はできるようにならないという顕著な例だと言えるでしょう。

難民の受け入れが決まったら、早い段階から職場・学校・地域とどのように連携をしていくか、考えていく必要があるでしょう。企業や学校との協力体制を構築するのはなかなか困難な面もありますが、企業に対しては、支援ネットワークに入ることで、結局は難民の日本語力の伸長にプラスになり、ひいては職場でのパフォーマンスも高くなる、つまり企業活動にとって有益であるということを丁寧に説明するとよいでしょう(詳しくは「就労支援」を参考にしてください)。

また、生活していることによる様々な経験は、日本語の習得を促進するタネにもなります。そのときに、支援者に求められることは、学習者が「学び方を学ぶ」ことを重視することです。例えば、毎日目にする日本語の単語をメモして自分なりの単語リストを作成することや、台所に料理に関係のある言葉を貼って覚えるなど、やり方はいろいろあると思います。学習者と一緒に、自分に合う方法を見つけることを楽しんでみると思います。

## 一緒に街歩き

「学習者が興味のあることを勉強するのが効果的」というのは、日本語学習支援者の誰もが思うことでしょう。Aさんの日本語学習支援を始めた時、母国の食べ物の写真や風景写真を持ち込んで、何とか興味を持ってもらおうとしました。でも、反応はいまひとつです。そこで、思い切って、一緒に外に出てみることにしました。スーパーに行き、公園で一休みして帰ってくるというメニュー。すると、受け身だったAさんが、「美容院」の前で立ち止まって「なに？」と質問してきます。「信号」、「自転車」、「気をつけて」…。スーパーでも、「エビ」や「玉ねぎ」を指さして言葉を尋ね、ノートに絵やひらがなを記しています。一休みするはずの公園は、ノートを見ながらの復習の時間となりました。特に、キャンプ生活が長いなど、日常生活に不慣れな学習者の場合、まずは、学習者と同じ目線で日本の社会や生活を見ることが大事と実感しました。

## (4) 自律的、継続的な学習に向けて

第三国定住難民の場合、集中的に日本語学習をおこなう6ヶ月を過ぎたころから、日本語学習の意欲が低下する例もあるようです。ある程度日本語でサバイバルできるようになると、日々の生活や仕事に追われて日本語学習が後回しになっているかもしれません。ですが、本人のキャリア形成、子どもの教育を考えると、中途半端な日本語では十分ではありません。目標設定を細かくして達成感を得ることや、学習記録をつけて進捗が目に見えるようにするなど、様々な工夫で継続学習ができるようにする必要があります。またその際、適切なアドバイスをしたり、勇気付けたり、ときには休むことを提案したりする支援者の存在が大切になります。

## episode

### ひらがな→カタカナ→漢字？

Aさんは、文字学習になかなか馴染めませんでした。半年近くマンツーマンで勉強しても自分と家族の名前を書くのがやっとです。ある日、偶然、Aさんは漢字グループに参加することになりました。すると、いつも「難しい」を連発していたAさんが、しっかり漢字を読み書きしているではありませんか。日々の生活のなかで漢字に多く触れていたのです。その次の回も、しっかり漢字を復習してきて皆に負けじと漢字クラスに参加していました。「ひらがなやカタカナがちゃんとできなければ、漢字は勉強できない」などという支援者側の思い込みが、学習者のやる気をそいでいるのかもしれないと、嬉々として漢字学習に取り組むAさんから教えてもらいました。

## (5) よりよい地域づくりに向けた視点

難民に対する日本語学習の提供やその支援は、難民本人のためだけでなく、中長期的にこの社会をどのようにつくっていくかという課題とつながってきます。難民に対する言語学習支援をおこなうことや、難民にわかりやすい情報提供をおこなうことは、多くの人が暮らしやすく相互に理解を深めながらよりよい地域をつくっていくことにつながります。外国人観光客や在住外国人にも役立つものとなるでしょう。日本人、難民双方が分断されることなく、互いによりよい地域をつくっていくために、地域社会における日本語学習支援を活用してみてください。